Japanese Red Cross Society NEWS

赤十字 NEWS

http://www.jrc.or.jp

JANUARY 2018
NO.932

1

平成30年1月1日（毎月1日発行）
赤十字新聞　第932号
昭和24年9月30日 第三種郵便物認可

「はたちの献血」新キャンペーンキャラクター 広瀬すずさんに決定！

CONTENTS

FEATURE__2・3
ありがとう あの時の「献血（いのち）」
今、救える命がある

TOPICS__4・5
近衛忠煇日赤社長　年頭のご挨拶
「ボランティア精神こそ支援の第一歩」

“明治150年”を機にひもとく日赤の歴史

駐日大使を中心に広がる人道支援の輪

大規模災害に備える
～みんなの連携が力になる防災～

世界の赤十字・赤新月社が集結
2年に1度の連盟総会・代表者会議がトルコで開催

Column
［とっさのとき、どうする？］
入浴中の事故予防と救助

AREA NEWS__6・7
茨城／群馬／神奈川／長野／京都／大阪／兵庫／岡山

Column
［健康豆知識］
ＲＳウイルス

WORLD NEWS__8
ルワンダの保健強化事業

赤十字新聞　編集・発行／日本赤十字社 広報室
〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3
TEL：03-3438-1311
一部20円
赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

人間を救うのは、人間だ。

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

ありがとう あの時の「献血（いのち）」

今、救える命がある

かつて輸血で命をつないだ方の切実な想（おも）い

がんや白血病の治療、事故や出産時の大量出血などで、今、この瞬間にも輸血を必要とする人がいます。科学技術が進歩した今日でも、血液を人工的につくることはできません。日々善意で行われる献血によって、輸血医療が支えられています。「もしあの時、輸血ができなかったら…」。こうした不安な想いを経験した３人の方にお話を伺いました。輸血を必要とする患者さんが安心して治療を受けられるよう、皆さまの献血へのご理解とご協力をお願いいたします。

今自分がいるのは、献血のおかげ。

熊耳宏介（くまがみこうすけ）さん／35歳

17歳で急性リンパ性白血病に罹患。21歳で再発、約１年半ずつ入院治療を受ける。その間輸血は継続的に実施。
患者同士の情報交換・啓発活動を行う「若年性がん患者団体STAND UP!!」の事務局長。

あの時命をつないでもらったことは ずっと忘れずに心にある

――まずはお１人ずつ、罹患（りかん）されたご病気と、輸血を受けた経緯についてお聞かせください。

熊耳さん（以下敬称略）：私は急性リンパ性白血病に罹患して、再発時を含め合計約３年治療のために入院しました。治療では悪い細胞（白血病細胞）を抗がん剤でたたくのですが、その作用は正常な細胞にも影響を与え、必要な血球や血小板なども減ってしまいます。その減った細胞が戻るのを待つ間、輸血で必要な成分を補うんです。特に再発時は減った細胞がなかなか戻らず、抗がん剤と輸血がセットになりました。つまり、輸血がなければ治療できず、ここに私はいなかったでしょう。再発した時は治癒率などから精神的にも参ってしまい、死を意識し続けた時期もありました。でもそれを乗り越え、治療を続けて今があります。献血をしてくれた人がいたことも含めて、自分は１人で生きているわけじゃないと実感します。

はるかさん（以下敬称略）：私は大学４年生の時に慢性骨髄性白血病にかかっているとわかりました。通常多くても9000くらいの白血球が52万もあって、その他の血球や血小板などの全部の値が少なかったので輸血を受けました。輸血の経験はその１度ですが、退院して少し落ち着いた時に「すごくありがたかったなあ」と感じて、改めて自分にも何かできることはないか考えるようになりました。

福田さん（以下敬称略）：私がかかった病気は急性リンパ性白血病の中でもフィラデルフィア染色体陽性タイプという病状の見通しが悪いもので、骨髄移植が望ましい状態でした。幸い兄の骨髄の型(HLA型)が適合し、提供を受けた造血幹細胞*を移植して数カ月後に退院できました。移植する時には化学治療法を行って自分の造血幹細胞を全て無くし、移植した健康な造血幹細胞が新たに血液を造り始める「生着」を待つのですが、その間、状態に合わせて大量の輸血を受けました。輸血は本当に治療の大きな支えです。約半年後には復学することができ、その後の人生も支えてもらいました。献血してくださった方に感謝しています。

＊骨髄の中で血液をつくる働きをしている細胞

勇気を持って、必要性を伝えたい。

はるかさん／30歳

22歳、大学４年生の時に慢性骨髄性白血病に罹患。
症状を改善するために発病時に１度輸血を経験。現在も抗がん剤を服用し、治療を継続中。
大学を卒業し、社会人生活６年目。

元気な時には分からなかった 血液の大切さ

――輸血を経験した時に感じたことや、それによって気付かされたことはありますか？

熊耳：入院中に歩いて外出をして、途中で息苦しくなりフラフラになって戻ったことがありました。実は血中の「ヘモグロビン」が極端に減って、酸素が運ばれない状態になっていたんです。緊急輸血を受けたらすぐに元気になる実感があって、輸血には“栄養ドリンク”というか、元気の源というイメージがあります。

福田：血液の数値と体調は確かにリンクしますよね。僕はインフルエンザの感染で病気が分かったんですが、白血球が減るとウイルスと戦えないから合併症が怖いですよね…。僕が輸血で気付いたのは、血小板が黄色いことでした。

熊耳：あの色はびっくりするよね。そうそう、血小板が少ないと、採血で針を刺しただけでも血が止まらなくなるんだよね…。

福田：血液検査の数値を見ていたから、酸素を運ぶとか、ウイルスと戦うとか、血を止めるとかの血液の働きがよく分かりましたよね。

はるか：闘病ブログを通じて知った白血病患者さんの中に、骨髄移植をしたけれど生着せず、毎日輸血で命をつないでいる方がいました。「もし、明日輸血ができなかったら…」という不安を目にして、血液が足りなかった場合の怖さを痛感したんです。その後ある時、知人との会話で「献血って毎日募集する必要ないよね」と言われて、必要としている人がたくさんいるとは言ったのですが、もどかしくて…。

福田：血液には有効期間があるとかいうことを知らない人は、多いでしょうね。

はるか：高校時代に、頻繁に献血をしている友達がいたんです。私もいつか行こうと思いつつ、行かないままで。輸血を受けると献血はできなくなるんですよね。献血って、今この時に困っている人を直接的に助けられるもの。自分も健康な時にしておけば良かったとよく考えます。

献血をどう身近に感じて もらえるか、若者に伝えていきたい

――10～30代の献血者数が10年で30%ほど減少しています。それを聞いてどう思いますか？

熊耳：自分の親に必要となれば、みんな献血をすると思うんです。私の友人もそうですが、自分の周りにそういう人がいると意識が変わる。私も、人からいただいたから何かしたいと思うんですが、できなくなって気付くんですよね。

福田：献血に対する思いは、病気をしてもちろん相当変わりました。でも自分はできないので、「献血をお願いします」という声を聞くと複雑な気持ちになります。

熊耳：そうだね。「ありがとう、でもごめんなさい」という、ね…。

はるか：献血バスが会社に来ると、同僚に何気なく勧めたりはしていたのですが。重要性を感じながらも、これまで自分のことで精いっぱいで、積極的に働きかけをしてなかったことに気付きました。自分の経験を説明して伝えるのは、勇気がいるので…。でも今回、多くの人に知ってほしいと思って。献血ってそんなに難しいことではなく、一番身近な社会貢献だと思うんです。

福田：献血をどう身近に感じてもらえるかということかもしれません。１回だけでも行ってみてもらえたら、それできっと変わる、感じてもらえることがあるんじゃないかと思います。

熊耳：若い人たちに訴えるのは若い人が良いと思います。ですから輸血経験の当事者として表に出て、感謝を込めながら、献血の大切さを伝えていきたいと思っています。

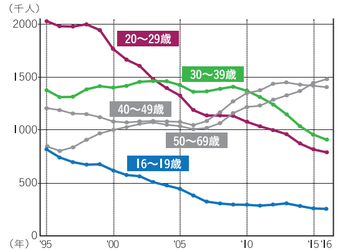
数字で見る献血

3000人
輸血を受ける患者さんの１日当たりの平均人数。これだけの方が皆さまの献血を必要としています。

16歳～69歳
献血が可能な年齢。献血の量や種類により区分されている他、服薬の有無や海外への渡航歴など、さまざまな基準に基づき、医師が総合的に判断してお願いしています。

21日間／４日間
輸血用血液製剤の有効期間は、赤血球が21日間、血小板が４日間です。長期保存ができないため、継続的なご協力を必要としています。

グラフで見る年代別献血者数の推移



血液の大切さ、ぜひ知ってほしい。

福田康介（ふくだこうすけ）さん／27歳

大学入学後の５月に18歳で急性リンパ性白血病に罹患。
同９月に兄からの提供を受けて骨髄移植。同年末退院。
移植前の治療時と移植後にも大量の輸血を経験。

献血の輪を広げる 17 文字のメッセージ！

第12回 赤十字・いのちと献血俳句コンテスト 受賞作品発表

日本赤十字社 第12回 赤十字・いのちと献血俳句コンテスト表彰式

受賞作品はウェブサイト（www.ken-haiku2017.jp）で見ることが可能

日本赤十字社は、昨年６月23日から約４カ月間にわたって第12回赤十字・いのちと献血俳句コンテストを開催しました。「いのちの尊さ・愛・友情・助け合い・感動、献血や赤十字の活動」などをテーマに俳句を募集。力作ぞろいの応募総数約23万句の中から上位15作品が、厚生労働大臣賞など各賞に選出されました。

12月９日に行った表彰式では、受賞者に表彰状などを贈呈。審査員長の俳人・黛（まゆずみ）まどかさんは、「命や献血といったテーマは難しいかなと思いましたが、身近な場面に感じ取って俳句にしていたことが印象的でした。皆さんの句を読んだ後は、温かい気持ちになり、温かさこそが、命のぬくもりであり、命の響きあいであると感じました」と講評し、笑顔で受賞者を祝福しました。

受賞作品（上位５作品・敬称略）

厚生労働大臣賞
【鹿児島県　白坂　昭典】
献血車　降りてあきつの　群れの中

文部科学大臣賞
【東京都　滝　莉杏】
金魚にも　声かけて入る　祖母の家

日本赤十字社　社長賞
【岐阜県　堀　葵】
風鈴の　音が聞こえて　風が吹く

日本赤十字社　血液事業本部長賞
【千葉県　大木　理巧】
アイス食べ　ママのけんけつまっている

ビカチュウ賞
【大阪府　近藤　友月】
ひまわりを　残していった　おじいちゃん

平成30年「はたちの献血」キャンペーン

「はたちの献血」は、献血者が減少しがちな冬でも安定的に血液製剤を患者さんにお届けするため、成人を迎えるはたちの若者層を中心に、献血への理解と協力をお願いするキャンペーン。1975年から続いています。今年は女優・広瀬すずさんがキャンペーンキャラクターに就任し、２月28日まで献血の応援活動を行います。

これを機に、「命のつながり」に思いをはせたという広瀬さんは、「10～20代の献血者が減っていると知りました。このままのペースで献血者が減っていけば、輸血が必要となった時に困ってしまうのは自分たちかもしれません。他人事ではないと感じています。まずは献血について知ってもらうため、ＳＮＳも利用して同世代に発信していきたい」と力強く語ります。

キャンペーンキャラクター 広瀬すずさん
1998年６月19日生まれ。2012年、雑誌『セブンティーン』で専属モデルに。
13年女優デビューし、以降、数多くの映画やテレビドラマ、CMなどで活躍中。

オリジナルグッズプレゼント

いっしょに行こう。

キャンペーン期間中は、全国の献血会場で献血される10～20代を対象に、広瀬すずさんオリジナルクリアファイルを先着７万人にプレゼント。

全国に148カ所ある献血ルームや血液センター（2017年4月現在）、学校やイベント会場に出動している献血バスなどで献血することができます。献血前には問診があるので、ご安心ください。

献血ルーム・献血バスの検索はこちらから
→ http://www.jrc.or.jp/donation/

平成30年1月1日（毎月1日発行） 第932号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

TOPICS

謹賀新年

ボランティア精神こそ支援の第一歩

日本赤十字社社長　近衛忠煇

新年おめでとうございます。申すまでもなく、赤十字運動の発展は、日頃から幅広いご支援、ご協力をいただいている皆様と共にあります。ここに改めて敬意を表し、深く感謝申し上げます。

昨年、わが国は台風や記録的な大雨による大規模災害を経験しました。被害を目の当たりにし、日本赤十字社としても、あらゆる災害に対する迅速な対応力をより高めなくてはならないと改めて強く感じました。そこで肝要となるのが、いま一度ボランティア精神の原点に立ち返ることです。災害の現場によって状況は異なり、一つとして同じものはありません。そこでまず情報を集約して共有し、指示系統を明確にして、皆が有機的に動く仕組みが必要となります。

ところが混乱した現場では、なかなかそれができません。だからこそ、まず現場に飛んで自身の目で見、耳に聞いた被災者の苦しみや悩みに直接向き合うボランティア精神が大切となります。被害が小さくても大きくても、「日赤は真っ先に来てくれ、最後まで残ってくれて心強かった」と言ってくださる方も多く、これこそが支援の在り方なのだと感じています。今後も、より迅速な活動のために、地元をよく知り、そこに根差した活動を日々行っている全国のボランティアネットワークとのより強固な連携が必要になると考えていますので、どうぞよろしくお願いします。

複合的危機が増える世界で日赤が果たす役割

赤十字の歴史は、戦争の犠牲者を敵味方の区別なく救うことから始まり、その活動を平時に生かすために現在の国際赤十字・赤新月社連盟が設立されてから、2019年で100周年を迎えます。平時の活動では災害救護が中心となりますが、近年世界では複合危機が増えてきました。貧困や失業などが原因で社会の緊張が高まり、政情不安となり、紛争に発展し、人口移動が起きるなど、戦時・平時と明確に区別できない状況が多くあります。このような事態に対応する際には、政治的な圧力を避け、中立の立場で人道上のニーズにのみ従って、公平に等しく被災者に接することが求められます。それができるのが赤十字です。

赤十字７原則（人道、公平、中立、独立、奉仕、単一、世界性）にしっかり基づいた活動がますます求められるこの時代に、国内外から私たち日赤へ向けられる期待が大きいと感じています。特に日本は、現在紛争が起きている中東やアフリカ諸国との間に歴史的なしがらみがなく、人種問題や宗教的摩擦もありません。長年にわたる官民合わせての現地での活動も高い評価を受け、好感を持たれています。こういった長所を生かせば、世界に貢献できることは多いのです。

現状に満足せず、常に新しい取り組みを

これまで想定できなかったような大規模な災害が増え、人道上のニーズが大きく変化している今、日赤の活動への期待はより高まっているといえます。ニーズに的確に応えるためには、今までやってきたことを決められた通りにやるだけでは十分ではありません。時代に合わせた取り組みを行うべく、感性を磨き新しいことにチャレンジしていく精神を保ち、イノベーティブであることを心掛けて活動したいと考えています。赤十字奉仕団員、ボランティアの皆様がその先兵となって活動に参加していただけることを期待します。

赤十字運動をさらに推進できるよう、今年も皆様と共に歩んでまいります。2018年が良い年となるよう、心より願っております。

“明治150年”を機にひもとく日赤の歴史

本年は、明治元年（1868年）から起算して150年に当たります。政府は、明治150年を節目として改めて明治期を振り返り、次世代につなげることは大変意義のあることとして、さまざまな取り組みを推進中です。

日赤初の災害救護は明治21年の磐梯山噴火

明治期は、近代国民国家への第一歩を踏み出した日本にとって、多様な価値観に向き合った激動の時代でした。その中で起こった日本最後の内戦と言われる西南戦争を機に、両軍の傷病者を救護することを目的として日本赤十字社の前身となる「博愛社」が設立されました（明治10年）。日赤はこの時以来「人道主義」を旨に、少子高齢化社会の進行や国際情勢の不安定など、先行きの不透明な本年も、皆さまからのご信頼を頂ける活動を続けてまいります。

政府は、①「明治以降の歩みを次世代に遺（のこ）す施策」、②「明治の精神に学び、さらに飛躍する国へ向けた施策」、③「“明治150年”に向けた機運を高めていく施策」を３つの柱とし、特別展示やシンポジウム、その他記念イベントなどを実施する予定です。明治時代に歩みを始めた日赤も政府制作の「明治150年ポータルサイト」（http://www.kantei.go.jp/jp/singi/meiji150/portal/）に名前を連ねています。

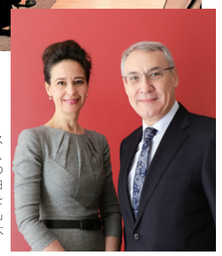
同サイトでは、日赤に関する公文書のアーカイブ閲覧なども可能。これを機に、歴史に触れてみてはいかがでしょうか。詳細はサイトをご覧ください。

第932号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可） 平成30年1月1日（毎月1日発行）

駐日大使を中心に広がる人道支援の輪

人道支援ネットワーク「Friends of Humanitarian Action」が誕生

↑昨年 12月１日の会合で「海外たすけあい」への協力を呼び掛けるパロ大使



→「私たちスイス人や世界の人々は、日赤の国内外での機能的な活動や日本の方の寛容さを尊敬しています」と発起人のパロ大使とユリア夫人

昨年10月30日、各国の駐日大使を中心とした有志による「Friends of Humanitarian Action（人道活動の仲間）」が創設されました。日本における人道活動や赤十字運動の認知度向上を目指し、ジャン＝フランソワ・パロ駐日スイス大使が協力を呼び掛けたプロジェクトです。さまざまな人道活動家が交流するコミュニティを作ることで、互いの知識や経験、ネットワークを共有し、活動に新たな価値を生み出すことを狙いとしています。

「人道支援が盛んで国際的な団体も多い日本で、人道支援に携わる人々が定期的に交流することの意義は大きい」とパロ大使。国際赤十字・赤新月社連盟（連盟）創設メンバーである日本赤十字社に、「世界でも非常に力強い赤十字社」として厚い信頼を寄せ、日赤への協力・支援も大切な活動と位置付けています。

活動の第一歩として、昨年12月の「NHK海外たすけあい」キャンペーンに際し各国大使からのメッセージを特設サイト（http://www.jrc-tsudukeru.jp）に寄稿。人道関連の行事などに合わせて活動を続けながら、2019年の連盟100周年や20年の東京パラリンピックにおいて、日赤とも共同した記念イベント実施の計画を進めていく予定です。12月１日にスイス大使公邸で行われた最初の会合には約30カ国の駐日大使らが参加。グループの理念を理解し、今後の活動に向けて親睦を深めました。

大規模災害に備える
～みんなの連携が力になる防災～

防災を楽しく学び、体験し、考える「ぼうさいこくたい」

内閣府など※の主催による、防災意識向上の呼び掛けを目的とした「ぼうさいこくたい（防災推進国民大会 2017）」が昨年11月26～27日に仙台市で行われました。

日本赤十字社はパネルディスカッションに参加した他、宮城県支部の協力を得て、救急法体験のブースを展開。NPO・ボランティアセッションでは日赤本社救護・福祉部の白土直樹次長が超少子高齢化社会における高齢者支援において、防災と地域包括ケアの融合が必要であることを提言しました。また、クロージングセッションには同部の山澤將人（まさひと）部長が登壇。さまざまな団体・企業が平時から連携する必要性を提起しました。

来場者は１万人を超え、災害時の自分や家族の守り方について考え、今後さらなる自助・共助による取り組みが必要であることの認識を共有しました。

※内閣府、防災推進協議会（会長：近衛忠煇）、防災推進国民会議（議長：近衛忠煇）

世界の赤十字・赤新月社が集結

２年に１度の連盟総会・代表者会議がトルコで開催

国際赤十字・赤新月社連盟（連盟）の第21回総会と2017年国際赤十字・赤新月運動代表者会議が昨年11月５～11日、トルコのアンタルヤで開催されました。

総会には連盟加盟社190社中史上最多となる180以上の社が参加。連盟会長を２期満了した近衛日本赤十字社社長の後任として、イタリア赤十字社社長のフランチェスコ・ロッカ氏が選ばれました。

また今回、国際組織として世界で初めて「ボランティア憲章」を制定し、赤十字運動の主軸であるボランティアの権利と義務が明文化されました。日赤も、同憲章が世界で人道援助を行う全てのNGO団体に広がることへの期待を発言。併せて、ユースや女性の一層の活躍を促進することなどが確認されました。

続いて行われた代表者会議では、核兵器廃絶への４カ年（2018年～21年）行動計画を採択。今回新たに、若い世代への啓発活動と、被爆者の声を世界に届けることが盛り込まれています。近衛日赤社長は唯一の戦争被爆国日本の代表としてスピーチし、被爆者に納得してもらえるような成果を届けられるよう、断固としての行動を求めました。

「とっさのとき、どうする？」は切り取って保存していただけます

file.7 とっさのとき、どうする？

家族がなかなかお風呂から上がってこない…もしも湯船で気を失っていたら!?

入浴中の事故予防と救助

寒いこの時期は、入浴中の急死者が激増。「ヒートショック」に気を付けましょう。

暖かい部屋から寒い脱衣所や浴室に行って裸になり、熱いお湯に漬かるという入浴時の一連の温度差は、血圧を乱高下させます。湿度の高い浴室では熱中症も起こしやすく、両者が複合的に作用するのがヒートショックの原理です。

急激な血圧の変化や脱水症状が生じると、意識障害などの重い症状を引き起こし、浴槽内での溺死・溺水事故につながることがあります。のぼせを感じにくい高齢者、高血圧や心臓などに持病のある方は、特に注意が必要です。家族がいつもより長湯だと感じた場合は、すぐに様子を確認しましょう。

入浴中に意識を失った場合

❶ 鼻や口を水面上に出し呼吸を確保（できなければ浴槽の栓を抜き、水位を下げて顔を出す）
❷ 協力者を呼び、右図のように入浴者を引き上げてバスタオルなどの上に平らに寝かせる
❸ 意識や呼吸の状態を確認し、意識がなければ、心肺蘇生（胸骨圧迫・人工呼吸）を試みる

脱衣室や浴室を事前に暖め、湯温を熱すぎない40度程度にして温度差を少なくするなど、ヒートショックを未然に防ぐ工夫も大切です。

背後から両脇に腕を差し込み、図のように片腕を両手でつかむ。浴槽から引き上げる際には両足を開いて重心を低くし、腰を痛めないように気を付けましょう

※詳細は赤十字救急法講習を受講ください。受講のお問い合わせは、日赤の各都道府県支部へ

平成30年1月1日（毎月1日発行） 第932号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

AREA NEWS

全国各地、あなたの生活のすぐそばで、日本赤十字社の活動は行われています。

- ●日本赤十字社支部（各都道府県）… 47 支部
- ●病院など医療事業施設 …… 103 カ所
- ●血液センターなど血液事業施設 … 232 カ所
- ●社会福祉施設 …… 28 カ所
- ●看護師など養成施設 …… 25 カ所

（平成 29 年 4 月 1 日現在）

茨城県

おいしく食べて赤十字活動に参加！ご当地フードが寄付つき商品に

茨城県龍ケ崎市の精肉店「髙橋肉店」と桜川市のそば店「めん工房ほさか」が、消費者が商品を購入すると売り上げの一部が日赤に寄付される「寄付つき商品プログラム」に参加。日赤の活動を推進する取り組みを始めました。どちらも受賞歴*のある人気店で、対象商品は髙橋肉店の「龍ケ崎コロッケ」と、めん工房ほさかの全商品です。県内３事例目となり、支援の輪が広がっています。

髙橋肉店「龍ケ崎コロッケ」
めん工房ほさか「天ざる」

＊髙橋肉店：Yahoo！ご当地メシ決定戦2014日本一
めん工房ほさか：日本ギフト大賞茨城県賞

群馬県

年に一度のお楽しみ「赤十字文庫」に新しい本が到着

前橋市地区赤十字有功会が、市内の小・中学校へ図書寄贈を行いました。これは、児童・生徒への赤十字思想の普及と読書のきっかけづくりを目的に、平成４年から毎年継続されている事業です。26年を経た今、市内全ての小・中学校に「赤十字文庫」が設置されています。

金澤壽夫会長は、「今後も文庫を充実させ、多くの子に赤十字に触れてほしい」と語りました。

赤十字文庫は順番待ちができるほど大人気（前橋市立石井小学校）

大阪府

大阪・岩手の奉仕団交流の成果「おいしい炊き出しを召し上がれ」

昨年11月26日、大阪府内の防災訓練に赤十字防災ボランティアが参加。同年５月の「食博覧会・大阪」で岩手県の赤十字奉仕団に教わった、岩手の郷土料理「ひっつみ」の炊き出しを行いました。具だくさんの「ひっつみ」は防災訓練の参加者に大好評。大阪と岩手の奉仕団は炊き出しの調理法を教えるなどの交流があり、その交流のぬくもりが参加者のおなかと心も満たしたようです。

「被災したら、こうした温かい食事は支えになりますね」と参加者

兵庫県

看護学生が「のじぎく賞」を受賞 救急法の学びが一つの命を救う

昨年10月、姫路赤十字看護専門学校1年生の中江陽菜さんが、倒れた男性に心臓マッサージを施している現場に遭遇。学校で学んだ赤十字救急法を生かして救急隊到着まで交代で心臓マッサージを行い、男性の命を取り留めました。

中江さんは人命救助に貢献した人などをたたえる兵庫県の「のじぎく賞」を受賞。佐藤四三学校長からも表彰状と記念品が贈られました。

「無我夢中でしたが授業で習った通りにできました」と中江さん

岡山県

院長とお茶を飲みながら気楽に質問 20年続く乳がん勉強会

岡山赤十字病院では、３カ月に１回、辻尚志院長による“乳がんの雑談・相談”勉強会を開いています。治療法の多い病気に関する知識を深め、納得できる主治医選びをしてもらおうと約20年続けてきました。雑談形式で、基本的な質問を受け付け、「隅っこで聞いているだけでもＯＫ」がモットーです。毎回患者さんやご家族など30人前後が参加し、参加者同士の交流の場にもなっています。

「知識を持ち具体的に話せば、合う主治医を見つけやすい」と辻院長

「知ってて良かった！健康豆知識」は切り取って保存していただけます

日赤のドクター＆ナースが教える
知ってて良かった！
健康豆知識

file. 41

乳児と高齢者は要注意！「RSウイルス」

伊勢赤十字病院 小児科 一見 良司（イチミ リョウジ）
三重県伊勢市船江一丁目 471-2 TEL 0596-28-2171

RSウイルス感染症は、風邪によく似た症状で、冬に流行する呼吸器の感染症です。２歳までの子どものほぼ100%が感染しますが、先進国では乳幼児における入院原因のトップであり、生後半年までの期間に最も重い症状を引き起こします。

学童期以降であればほとんどが咳や鼻水程度の軽い症状で済みます。しかし、１歳未満では細気管支炎や肺炎を来すことがあり、早産児や、特に免疫力の弱い乳児、心肺に持病のある乳児の場合にはさらに重症化することも。一度の感染では免疫を獲得できず、たびたび発症を繰り返すこともあります。また、成人であっても高齢者、特に慢性呼吸器疾患、喘息、慢性心疾患や重度の免疫不全状態の方は注意が必要です。

感染経路は主に飛沫感染と接触感染です。他者への感染期間は通常８日間ですが、乳幼児では最長３週間程度と言われています。また、感染に気付かない大人がウイルスを運んでいるケースもあります。予防には、ウイルスへの接触を避けるのが一番です。小さな子どもへの感染を防ぐためには、症状のある家族との接触を避けること、おもちゃやドアの取っ手をアルコールなどで消毒すること、家族全員が繰り返し手洗いを行うことなどが有効です。

1歳未満の感染率は50～70%。乳児自身の対策は難しいため大人が「マスク」「手洗い」「消毒（おもちゃ、遊び道具も）」などの対策をしましょう！

神奈川県

「当たり前の生活」を奪われた人々の記録 写真で伝える人道支援

昨年12月19～25日、神奈川県支部・ICRC・キヤノン（株）共催で、世界の紛争死傷者の約半数が集中するシリア、イラク、イエメンの真実を伝える写真展「わたしの街を返して」が開催されました。紛争に翻弄される人々を記録した写真に加え、破壊された街を再現したオブジェの展示など、一般市民も攻撃の対象となっている痛ましい紛争の現実を肌で感じられる写真展となりました。

迫力ある写真に見入る人々

長野県

“ロボット”を使用した手術が成功 入院期間は従来の半分以下に！

諏訪赤十字病院で、手術支援ロボット「ダ・ヴィンチＸｉ」を使った甲信越地方では初の呼吸器外科手術が行われました。通常、胸の部分を25～30センチ切る開胸手術と胸腔鏡の手術が主流の胸腺悪性腫瘍の症例に対し、肋骨付近に計４カ所の穴を開け、アームなどを入れて胸腺を全摘出。執刀した吉田医師は、「手術時間を30分以上短縮できた」と手応えを語りました。

「ダ・ヴィンチXi」使用で通常10日ほどの入院期間が４日で退院可能に

茨城県 神奈川県 京都府

列車、原子力、化学、船上……あらゆる事故・災害を想定し各地で訓練

京都府支部と京都第一赤十字病院DMAT（災害派遣医療チーム）が、昨年11月８日、列車事故総合訓練に参加しました。列車が踏切内に進入してきた自動車に衝突・脱線、多数の乗客が負傷したとの想定の下、各機関と連携して救護所の設置や負傷者への対応を行いました。

12日には、京都府原子力災害総合防災訓練に舞鶴赤十字病院の救護班が参加。防護服を着用した状態で放射線量の測定や被ばくの恐れのある傷病者の手当て、除染などの手順を確認し、他の医療機関と協力して訓練しました。

茨城県では12月２日、境町で行われた化学災害訓練に古河赤十字病院が参加。液体塩素を積んだタンクローリーの横転事故にバスが巻き込まれ、外傷に加え液体塩素に触れて重傷になった患者への対処を実践しました。

12月６日、日赤神奈川県支部と横浜市立みなと赤十字病院は、横浜海上保安部との業務協定による救助訓練を横浜港内で実施。船舶同士の衝突を想定、照明の消えた暗い旅客船内で治療の優先順位を決め、重傷者から順に巡視艇などに乗せて搬送する訓練を行いました。

日没後、救護テントの照明を頼りに緊迫した列車事故の訓練（京都）

事故を想定した旅客船内で、海上保安部職員と協働（神奈川）

バングラデシュ南部避難民　救援金受け付け中

避難民を取り巻く状況が深刻化する中、日赤では引き続き下記のとおり救援金の受け付けを行っています。ご寄付いただいた救援金は、日赤が行う、現地に医療班を派遣するなどの支援に加え、避難されている方々の食料や生活必需品の確保、安全な水や衛生などの緊急ニーズに応えるとともに、こころのケアや離散家族支援などに充てられます。皆さまの温かいご支援をよろしくお願いいたします。

■救援金名称：バングラデシュ南部避難民救援金
■受付期間：平成 30 年 3 月 31 日（土）まで
■協力方法

（1）郵便振替によるご協力（ゆうちょ銀行・郵便局）
口座番号　00110-2-5606
口座名義　日本赤十字社（ニホンセキジュウジシャ）
※ 通信欄に「バングラデシュ南部避難民」と明記してください
※窓口でのお振り込みの場合は、振込手数料が免除されます
（ATM による通常振り込みおよびゆうちょダイレクトをご利用の場合は、所定の振込手数料がかかります）

（2）銀行振り込みによるご協力
①三井住友銀行　すずらん支店　普通　2787769
②三菱東京 UFJ 銀行　やまびこ支店　普通　2105774
③みずほ銀行　クヌギ支店　普通　0623404
※ 口座名義はいずれも「日本赤十字社」 ※ ご利用の金融機関によっては、振込手数料が別途かかる場合があります

（3）クレジットカード・コンビニエンスストア・Pay-easy によるご協力
詳細は日赤のサイトをご覧ください。
日本赤十字社　救援金　バングラデシュ南部避難民　検索
http://www.jrc.or.jp/contribute/help/cat817/index.html

© Victor Lacken / IFRC

11月常任理事会開催報告

平成29年11月29日、本社において平成29年度第７回の常任理事会が開催されました。

１．理事会に付議する事項について
（日本赤十字社救護規則の一部改正等）
審議の結果、理事会に付議する事項については、原案のとおり同日開催の理事会に付議することが了承されました。

また、平成29年度上半期事業報告、連盟総会・代表者会議、予算の補正にかかる10月分の社長専決事項の決定状況について、それぞれ報告しました。

11月理事会開催報告

平成29年11月29日、本社において平成29年度２回目の理事会が開催されました。

１．規則の改正について
（日本赤十字社救護規則の一部改正等）
審議の結果、規則の改正については原案のとおり議決されました。

また、平成29年度上半期事業報告、連盟総会・代表者会議、平成29年度NHK海外たすけあい、第46回フローレンス・ナイチンゲール記章受章者からの紛争地域での活動について、それぞれ報告しました。

12月常任理事会開催報告

平成29年12月15日、本社において平成29年度第８回の常任理事会が開催されました。

今回の常任理事会は、付議事項はありませんでしたが、日本赤十字社長期ビジョンの策定にかかる進捗状況、平成29～30年度プランディング広報戦略、予算の補正にかかる11月分の社長専決事項の決定状況について、それぞれ報告しました。

天皇皇后両陛下から御下賜金

12月21日、天皇皇后両陛下から、日本赤十字社の事業奨励のために金一封を賜りました。

この御下賜金は、災害等による被災者救援事業のための資金として有効に使用されます。

present プレゼント

日赤の創立者、佐野常民の伝記

20名様にプレゼント！

日本初の蒸気船や機関車を開発、医師として西南戦争の救護活動に奔走した稀代の賢人。

提供：日赤国際人道研究センター

希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールでご応募ください。
①お名前（匿名をご希望の方は、その旨もご記入ください）
②郵便番号・ご住所　③電話番号　④年齢
⑤赤十字 NEWS 1 月号を手にされた場所（例／献血ルーム）
⑥ 1 月号で良かった記事、興味深かった記事はどれですか？（いくつでも）
A. 表紙　B. 今、救える命がある
C. ボランティア精神こそ支援の第一歩
D. “明治150年”を機にひもとく日赤の歴史
E. 駐日大使を中心に広がる人道支援の輪
F. 大規模災害に備える　G. 世界の赤十字・赤新月社が集結
H. とっさのとき、どうする？　I. エリアニュース
J. 健康豆知識　K. プレゼント　L. ワールドニュース
M. 人道支援の現場から
⑦赤十字NEWSのご感想、扱ってほしいテーマ、その他Voice（読者の声）への投稿もお待ちしています。

郵送／〒 105-8521
東京都港区芝大門 1-1-3　日本赤十字社
広報室　赤十字 NEWS 1 月号プレゼント係
FAX ／ 03-6679-0785　メール／ koho@jrc.or.jp
（件名「赤十字 NEWS 1 月号プレゼント係」）
1月29日（月）必着
※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます
※個人情報は賞品の発送のみに使用いたします

平成30年1月1日（毎月1日発行） 第932号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

WORLD NEWS

ルワンダの保健強化事業

ルワンダ赤十字社の職員とラジオ番組を制作する広報ボランティアのヴィンセントさん（右）

苦しみを乗り越えた「助け合い」の国で、健康で安全な暮らしづくりを支援

1994年の大虐殺や内戦からの復興に取り組むルワンダ。日本赤十字社は2012年から、水、衛生、栄養に関する保健事業を支援しています。娯楽の少ない同国では映画やラジオを使った啓発活動が人気。赤十字の地道な活動で、安全で健康な暮らしを自らの手でつくる意識が住民に広がっています。

生計向上支援から、公衆衛生の啓発まで ルワンダで成果を上げる赤十字事業

日赤は、2012年からルワンダでの保健事業の一環で、生計の向上と栄養状態を改善するための支援を実施してきました。

生計向上支援では、住民の連携が強い村を「モデル・ビレッジ」として認定し、家畜の共有、家庭菜園などの成果を上げ、現在は他国の赤十字社に引き継がれています。アフリカでは家族以外で家畜を共有することがめったにないため、ルワンダの成功は異例です。

〈家畜の共有〉住民に飼育指導をした上で家畜を譲渡。生まれた家畜を他のメンバーに譲ることで、継続的に栄養源や収入源を確保できる仕組み

内戦後、ルワンダの人々に根付いた「助け合う」精神が、それを可能にしたと考えられます。

復興の途上にあるルワンダでは、安全な水や衛生的なトイレの普及率がまだ低く、衛生環境の改善や人々の意識改革が課題です。そこで日赤は現在、ルワンダ赤十字社が実施する「モバイルシネマ（移動映画館）」やラジオ番組による啓発活動を支援しています。

モバイルシネマは、スクリーンや上映機材を持って村々を巡回し、防災や健康に関する知識を学べるアニメ映画を上映する活動です。ルワンダ赤十字社の職員とボランティアが、クイズやゲームも交えながら住民が楽しく理解できるように工夫を凝らしています。

赤十字職員とボランティアが 企画・出演。ラジオ放送も人気

ラジオ放送も、ルワンダでは大切な情報源であり娯楽の一つです。番組では、防災や伝染病に関する話題、健康的な栄養の取り方などを紹介。赤十字職員、赤十字ボランティア、専門家が対話形式で進め、リスナーとの質疑応答を行うなど双方向の番組づくりを行っています。

音楽や動画など人々の気持ちを盛り上げる演出で、モバイルシネマ会場に集まったたくさんの人は、楽しみながら知識を吸収

内戦時に難民として国を逃れ、帰還した人々も祖国への思いを胸に赤十字ボランティアとして活動を支えています。その中の1人でラジオ放送を担当するヴィンセントさんは「リスナーから地域の情報や意見、災害発生の情報などが寄せられるようになり、赤十字が住民の健康と安全を支えていると感じられてうれしいです。日赤の皆さんの支援に感謝しています」と語りました。

こうした活動が実を結び、カロンギ郡では手洗いが習慣化されてコレラやマラリアなどの感染症患者の減少が報告されています。災害や病気から命を守るためには、事前の備えや予防に対する住民自身の意識向上が欠かせません。メディアを使った啓発活動は、人々を引きつけながら意識の変革を促し、着実に成果を上げています。

VOL. 15 人道支援の現場から

近衛連盟会長が率いた「人道ファースト」の最前線で

スイス・ジュネーブと聞くと、風光明媚（めいび）な観光地で優雅に仕事をしているイメージかもしれません。でも着任してからの8年間は、東奔西走の慌ただしい日々でした。私の任務は、国際赤十字・赤新月社連盟（連盟）の会長を務めていた近衛日赤社長の補佐。190の赤十字社からの要求、抱える問題に向き合う連盟会長職は、時には会長が直接その国に赴いての交渉や人道外交が必要となる難しい仕事です。近衛前会長がこなした人道外交出張は8年間で60回以上に上り、必要とあれば、今にも落ちそうな旧型ヘリコプターで被災地に向かったことも。全てに同行した私も、おかげで度胸がつきました。

昨年11月の近衛前会長の満期退任に伴い、私も会長補佐の任を解かれ、帰国します。これまで私が所属していた連盟の役目は、各国の赤十字社が行う活動のサポート。直接「現場」の支援に携わることはなく、その国の弱者を間接的に支えるのが仕事でした。しかし、これからは違います。近衛前会長が「人道における連帯の精神」を実現するため、心血を注いで尽力される姿を一番近くで見てきたからこそ、海外だけでなく、日本の「現場」でも活動できるこれからの日々に期待を膨らませています。

田中 康夫
Yasuo Tanaka
国際赤十字・赤新月社連盟（スイス）
会長特別補佐官